



武術界の怪人

山田英司

測定できた時点で達人じゃない。
だから何かの試合に出た時点で
達人じゃないの!

聞き手／谷川貞治 合いの手／山口日昇

中国武術の松田隆智の拝師弟子にして、元『フルコンタクトKARATE』編集長。現在も達人シリーズなどの書籍を発行する編集者でありながら、実戦を想定した実験・検証を続ける。武術界の怪人が語る、現代格闘技論と実戦論と達人論!

武術的な頭のよさと頭の悪さがあるわけね。
じゃあ武術的な頭の悪さは何がなごう……

山口 山田さん、今日はまず、山田さんが思う『本物』と『偽物』の境目を聞いてみたいんです。

山田 武術に関して言うと、本物を決める条件が10個あったとしたら、そのうちの一番大事なことは、まずはちゃんと伝承しているかということ。どうしてかという武術というのにはまず「伝承」なんです。一番の本物か偽物かを見分ける鍵は先生がいるかどうか。ぶっちゃけ、中にはウチの本を読んだりして教えている先生もいるんですね。

山口 つまり自己流ってどういうことですか？

山田 自己流です。

山口 師匠がいない。

山田 そうですね。まず伝承が正しくない。そこにその人の強い弱い関係ないです。

谷川 あ、強い弱い関係ないんだあ。

山田 ただし、そこで極真みたいに強い弱いを判断する団体もあるけども。空手なんかも元々そうだったんだけど、だいたい伝承っていうのは型だから、そこに強い弱いの判断はない。たとえば型が10個あるとしたら、何個まで覚えたら初段ですよとか、全部覚えたら免許皆伝ですよっていうのが基本になつて。それは合気道でもなんでもみんな

そうです。なかには柔道みたいに乱取りがないとダメとかそういうのもあるけども、柔道なんかでも型は覚えなくてダメなわけですよ。だから武術の場合はまず伝承なんです。そうすると、何々流って名乗った場合、じゃあ先生は誰ですか？ と。だからその武術をやってる人たちは、その系図とか系譜にこだわるわけです。

谷川 はあく〜ん。

山田 だから『武術大辞典』とか、中国拳法でもそういう本があつて、売れるわけですね。そこに価値観を見出してるわけ。で、何々流はいつの時代で終わりとか、江戸時代ではどこがどう違うとかなるわけですね。でも、伝承っていうのは勝手に変えられても困るわけです。だから、まずは伝承が正しくされてるかどうかひとつ。で、ふたつ目は「強さ」。強いかどうかなんです。

谷川 強いかどうかはふたつ目なんだあ。

山田 だから勝ち負けとはまた別。たとえば初見良昭さんなんかもあるけど、いま忍者なんかいるわけじゃないですよ。

山口 伝承っていうことといえば、忍術はどこで伝承されてるんだっていう話になりますね。

山田 ただ初見さんも結構強いわけ。で、うまい。だから伝承としてはどう考えたって戸隠流忍法とかなんかついていうのは嘘なんだろうし、評価はされてない。でも強いしうまいから、初見さんなんかは一応偽物には入らない。